

東京教育大学がこの三月いつは  
いて名実ともに消えてなくなる。  
縁あってその前身、東京高等師範  
学校、東京文理科大学に学び、の  
ち東京教育大学の教師をしたこと  
もある人間として、心静かである  
ことは難しい。

もう四十年近くもの昔のことにな  
るが、東京高等師範学校に入学  
早々のまだ何もわからぬとき、わ  
れわれはキャンパスの一隅、占春  
園という庭園のようなところへ集  
められて、秋の歌を練習させら  
れた。

きりのはきはきにちんよの  
あきまはなきがけぢぢ  
なのみなるはいきまをすてて  
さめてたておのこわれら  
宣揚歌という。歌詞はかりでな  
く曲の調へが何とも言えぬ悲しさ  
にうつまわっている。どうしてこ  
な歌をまっさきに教えるのか不思議  
であった。桐きりの花のついで  
た徽塵(きしよ)の制帽をかぶっ  
たばかりの新生生の前に、もう教  
えることを考えよ、と言われたの

である。いまにして思えば象徴的  
ですらある。学生はことあれば  
この歌をうたった。何十年の間、  
こんにちのことがあつたのを知す  
るかのよに換歌(はんか)の稽古  
(けいこ)をしていたのである。  
東京教育大学のみなもをたど  
って行くと明治五年創立の師範学

# うしろの学校の

古比滋 外山



## 東京教育大の廃学に思う

学が生まれる。しかし、東京高師  
は廃止されず、併置されて残っ  
た。この両校が中核となつて戦  
後、新制大学の東京教育大学が発  
足するのだが、その間、新大学の  
理念、性格をめぐって両校関係者  
の間ではげしい議論がおこつた。  
難産の末生まれた新大学は名を  
学がつきつき教育大学に改名して

校に至る。これが東京師範学校と  
なり、さらに東京高等師範学校に  
なる。東京高等商業学校が東京商  
科大学、東京高等工業学校が東京  
工業大学に昇格したのに、東京高  
等師範学校の大学昇格はなかなか  
実現しなかつた。その昇格運動の  
中で生まれたのがさきの宣揚歌  
(大和資雄氏作)である。  
昭和四年、やっと東京文理科大

しまったのである。いま学芸大学  
を名乗るのは東京学芸大学のみ  
なつた。  
一般大学である東京教育大学は  
いたたまれない情勢にとりかこま  
れたという感じである。われわれ  
は暗い気持ちになつた。  
そして、移転問題である。結

なことは言っていられない。母校  
廃学に向ける鎮魂歌の伴奏とし  
て、けだしうってつけである。  
その東京文理科大学が昭和二十  
八年に開学となつて、卒業生を淋  
(さび)しがらせた。そしてこん  
どまたその後身の東京教育大の廃  
学である。二度まで母校の消滅と  
いう運命にめぐりあつた、柄にも  
なく学校とは何かという問題を考  
えないではいられなくなる。  
学校がいれものの建物でないこ  
とは、はっきりしているが、目に  
見えない心の中の学校がどうい  
うものになるのか。それをこれから  
われわれはめいめいで育てて行か  
なくてはならぬ。  
それはそれとして、当分は、亡き  
母校の輪(まわ)いをかぞえる日々  
がつづくであらう。いまにして、  
桐の葉は木に朽ちんより  
秋来(あき)はなきがけ散らむ  
を口(くち)さむと、さすがに蕭条  
(しよじよ)として心が澄ん  
びるのを感じる。  
(お茶の水女子大学教授・英文学)